

衣装ケースだったと思われるこの箱に、なぜそんな跡があるのでしよう。

ヴァレー地方で一三世紀末につくられた「落書の櫃」<sup>47・48頁</sup>をみたときも動悸がはやみました。

ヨーロッパハイマツを材にした大きな収納箱ですが、たくさんの中書があるのです。□と×、△と◇、○と花びら、といったアルプスらしい文様のほか、腰に剣をさした騎士の図などもあり、いまの子がヒーローものにあこがれるように、騎士にあこがれていたかもしない少年の姿が思ひうかびました。

博物館の展示は、先史時代から現代までのヴァレー地方の歴史とともに紹介するもので、みごとがありました。先史時代の集落模型をみているとき、学芸員のパトリックさんが「シオンのふたつの丘は、ひとつがアフリカ、もうひとつがヨーロッパの岩なんです」となにげなくいいました。そのときは「アルプスにアフリカの岩?」と半信半疑だった

たのですが、帰国後、地球物理学が専門の知人たずねたところ、パトリックさんのいうとおり、ここはとくべつな場所でした。

話は超大陸（パンゲア）があつたころにまでさかのぼります。いまのヨーロッパとアフリカのあいだには、テティスとよばれる浅い海がありました（地中海はこの海のなごりです）。約二億年まえからプレート運動が活発化し、パンゲア大陸は分裂、アフリカ・プレートがヨーロッパ・プレートに衝突し、のりあげるかたちになりました。約三〇〇〇万年まえのことです。そのとき、ヨーロッパ側の厚くてかたい大陸地殻に、テティス海の薄い地殻がおしつけられ、折れまがつてしまい、めくれあがつたりしてできたのが、いまのアルプスなのだそうです。

ヴァレー地域はまさに造山運動の最前線。アフリカ・プレートの一部がつきだしていくふしげではない、とのことでした。

日が暮れるまえにシオンのふたつの（ヨーロッパとアフリカの）丘の遠景を撮ろうと、三キロほど西の山にのぼりました。山頂にある古城の廃墟をふもとからみて、あそこへゆけば夕日がてらすふたつの丘がみえるはず、と考えたのです。葡萄畠の脇道をぬけて頂上をめざすのですが、日はどんどん落ちてゆくのに私の足は思うようにうごきません。肺もはりさけそう。同行のSさんに「私のことは気にせず、いそいで！」などと八甲田山めいた悲壮さでたのもといつたハブニングもありましたが、山頂にたどりつき、岩のうえにあおむけになつてみあげた夕空の美しかったこと。

残照にかがやく周囲の峰々にまもられるようにならずかに夕闇にしずんでゆくふたつの丘をながめながら、聖堂の床の岩はアフリカの岩だったんだと思いかえし、自然と歴史の壮大さに、あらためて息をのみました。

## ハイジの国の中世

小澤実 歴史家

Minoru Ozawa

わたしたち日本人の多くがスイスで思い起こすのは、「アルプスの少女ハイジ」ではないだろうか。TVアニメとして登場したのは一九七四年。その後繰り返し放映されたものをわたしも観た。美しいアルプスを舞台に、少女ハイジ（アーデルハイド）の成長と人々との交流が描き出されている。原作は一八

八〇年にスイスの作家ヨハンナ・シュピーリによつて書かれた教養小説である。これにより、スイスとは、抜けるような青い空を背にアルプスに抱かれた風光明媚で牧歌的な国というイメージが日本では広がつたように思われる。

シュピーリによる原作が刊行されて一世紀半近く

現在のスイスが位置する地域はもともと神聖ローマ

マ帝国の一部であった。独立の芽は一三世紀末にさかのぼる。一二九一年八月一日、ウリ、シュヴィーイツ、ウンターヴアルデンの三州が誓約同盟を結び、領主であつたハプスブルク家のアルブレヒトに対し、従来通りの特権と地位の保全を主張した。これがイスの建国記念日とされる日の出来事である。その後、神聖ローマ帝国の皇帝位を獲得したハプスブルク家は、スイスの地に何度も兵を向けてきたが、現地の農民たちはことごとくこれらを破つた。ハイジとともにわたしたちのよく知るスイスの人物にウイリアム・テル（ドイツ語ではヴィルヘルム・テッレ）がいる。彼は、息子の頭の上においてリンドゴを、当時広く使用され始めていたクロスボウ（洋弓銃）で撃ち抜くことを領主の代官に強要され、見事果たした。その後代官は殺害された。実のところ、この逸話は歴史的事実ではない。しかし、一四世紀になつて人々の口の端に上るようになつたこの逸話は、中世末期のハプスブルク家とスイス盟約者団との関係を反映している。

盟約者団という山間の小さな政治集団が飛躍的な発展を遂げたのは一三世紀以降である。その理由の一つは、アルプスの南北をつなぎ、経済交流を活性化させるザンクト・ゴットハルト峠が開通したことである。この峠道は、すでに開けていたいくつかの峠越えのルートをおさえ、最重要ルートとなつた。アメリカのある歴史家の言葉を借りるならば、一三世紀は「中世商業革命」の時代であった。アルプスの北では、グリーンランドからロシアにいたる経済ネットワークを支配したハンザが力をつけつつあつた。他方でアルプスの南では、十字軍の活性化によって東方の产品がもたらされるや、地中海を往来する商人が爆發的に増え、なかつ簿記や為替といつて騎行するモンゴル帝国の活動と支配により、ヨーロッパ半島から日本にいたるユーラシア世界全体が一体化しつつもあった。このような「モンゴルの平和」のもとで、イタリア商人やユダヤ商人らは様々な产品を求めてはるかインドや中国にまで足を運んだ。アルプスというヨーロッパ半島の背骨の南北を結ぶ場にあつたのがスイスであり、峠道を南北の商品が行き交うハブのひとつとして機能していた。

二つ目の理由は、今述べた南北の商業ネットワークの結節点となつたスイスには、数多くの都市が成立したことである。意外に思われるかもしれないが、スイスは中世以来都市がひしめきあつてゐた空間である。ローマ時代からカロリング時代にかけていくつもの都市的集落が成立し、「中世商業革命」によりもたらされた大量の产品を取り引く市場のみならず商人や巡礼者への宿泊施設を提供した。スイスは大陸の中で比較的古い時代から名の知られた地域であり、古代以来の資産を活用しながらチューリヒ、ベルン、ジュネーヴ、ゾロトウルンなどが発展した。バーゼルにいたつては、一四三一年に、全キリスト教世界の問題を教皇以下司教たちが論じ合う公会議が開催される場として選ばれた。

三つの理由は、様々な思想を持つ人々の避難所の役割を果たしたことである。すでに見たように、フランスとドイツの間にあつたアルザス＝ロレーヌ地

方やスペイン・ハプスブルク帝國から独立したオランダがそうであつたように、多様な言語や文化が交錯する地域は、政治的圧力からの緩衝地帯ともなる。ツヴァイニングリやカルヴァンがこの地に現れて宗教改革をすすめたのは偶然ではない。中世以来の歴史がスイスをそのような場として育てたのである。寛容を論じるルソーもまたスイスの人である。

四つ目の理由は、山間部の自由農民らの「出稼ぎ」としての傭兵稼業の発展である。スイスは山あいの世界であり、西洋中世社会の他の地域で行われていた穀物生産はほぼ不可能である。その代わりに山林や牧草地を使った牧畜が盛んであった。こうした牧畜をなりわいとした農民たちは、自分たちの暮らす村々に自衛のための組織を作つた。彼らのなかには傭兵としてヨーロッパ各地に出稼ぎに出かけるものも数多くいた。よく知られているように、中世後期から初期近代にかけて、ヨーロッパ各地で、百年戦争、宗教戦争、農民戦争、三〇年戦争と絶え間なく戦争が繰り返された。そのなかにあつてスイス傭兵は、その勇猛さを知られる存在となつた。とりわけ一四七四年にフランス王がブルゴーニュ公に勝利を収めた一連の戦いでは、スイス人傭兵が決定的な役割を果たした。フランス王だけではない。彼らにとってのお得意様の一つは教皇庭であった。ついでにいうと、ハイジのおじいさんも元傭兵であった。

一六四八年、ウエストファリア条約により、スイスは神聖ローマ帝国から完全に独立した。ウイーン会議を経て一八一五年には、永世中立国として承認され、今に至る。しかし二〇〇二年には、永世中立

国という立場を主張しつつ、国連の加盟国として承認された。中世以来、スイスが果たしてきた国際政治におけるバランスとしての役割が、再度注目を集めている。

ひと通りスイスの歴史を振り返ってみたところで、シオンの歴史に踏み込んでみよう。実のところ、シオンがスイスの一部となつたのは、フランス革命からナポレオンに至るフランスの影響力の増大に反対するウイーン会議の結果である。ナポレオン没落後の一八一五年に、ナポレオン支配下のフランスに属していたヴァレー州が、スイス連邦の一部に所属したことによってである。つまり、スイスを構成する二二州のうち、シオンが位置するヴァレー州がスイスの一部となつたのは、比較的最近のことである。しかしシオン（ドイツ語名ジッテン）それ自体の歴史は古い。考古学的には新石器時代の遺跡が発掘されており、その後ケルト人の集落として栄えた。ローマ帝政期には属州アルペス・ポエニアエとしてローマ帝国の一部に組み込まれたこの地域には、三八一年に、最初の司教座としてオクトドゥルム（現マルティニ）が設置された。その後、司教テオドルスは、シオンに教会を、隣接するサン・モーリスに修道院を建造した。しかしオクトドゥルムはローヌ渓谷の河川氾濫の影響を受けやすかつたため、五八九年にシオンに司教座が移動された。オクトドゥルムにせよシオンにせよ、アルプス以北の司教座としてはかなり早い部類に入る。

この地は東からはアレマン人、西からはブルグン

ト人、南からはランゴバルド人というように様々な民族が入れ代わり立ち代わり侵入し定住する場となつた。それぞれの民族集団が独自の言語と文化をもちこんだ。その後、カール大帝の支配下に入り、八四三年のヴェルダン条約では、現スイスの西側がフランスの起源となる西フランク王国、東側がドイツの原型となる東フランク王国領に分割された。シオンは西側に組み込まれた。その後もこの地は複雑な歴史を歩む。

シオンの歴史は、紀元千年をまえにして大きく変わった。九九九年、この地を支配していたブルグント王ルドルフ三世は、シオン司教に対し領地を含めた特權を与える。この特権により、シオン司教は、一定空間を支配する聖界諸侯となり、ヴァレー地方の有力諸侯の一つとなつた。教会や修道院ときくともにやら雲や霞を食べて神に仕えているといいうイメージがあるかもしれないが、広大な領地を獲得した聖界諸侯は、領民、武力、そして官僚組織、それらを支える自前の経済力を備えた、一国一城の主である。彼らは領内を管理するために独自の貨幣すら流通させた。シオン司教もまた、そのような立場を獲得したわけである。

現在残るノートルダム・ド・ヴァレール聖堂が建立される一二世紀は、いわゆる叙任権闘争を経た直後のことである。叙任権闘争とは、司教を任命する者は世俗権力か教会かをめぐって教皇と皇帝があらそつた権利闘争である。シオン司教領もその渦中に巻き込まれ、結局は世俗諸侯のサヴォイア公が代々の司教を任命するシステムが定着した。この時期か

ら一四世紀にかけて、ノートルダム・ド・ヴァレール聖堂に加えて、多数の聖堂がシオンのあちこちに建立された。こうした信仰の場の増加も、すでにのがべた「中世商業革命」前後の経済ネットワークの緊密化により、スイス全体で人々や産品の往来が激しくなり、聖堂の改修や新築に投資する余裕が出てきたことと深い関係がある。

ノートルダム・ド・ヴァレール聖堂には、中世にさかのぼる家具や現存最古といわれるオルガンが保存されている。壁画や彫刻が初期中世にさかのぼることは多くの教会で認められるが、木製の家具といふのは珍しい。珍しいというよりも、ヨーロッパ全體を見渡しても大変まれな事例である。実のところ、スイスは、こうした古い木製の品が、他の地域に比べてもかなり残っているといわれる。大きな理由は、スイスの地理環境とそれに由来する文化環境にある。一つは、高地であるために戦場になることが少なかつたことである。教会や修道院はとくに略奪や破壊の対象となりやすい。初期中世以来ヨーロッパは、戦争や侵入が短いサイクルで繰り返されてきた。しかしスイスのかなりの部分はその難をのがれた。二つ目は、高地であるために気温と湿度が一定しており、木材などの保存に都合が良かつたことである。そのような保存条件を用意する空間は、ヨーロッパでも限られている。スイスは、北欧と同様、その条件を満たした数少ない場所である。シオンのノートルダム・ド・ヴァレール聖堂もまた、そうしたスイス特有の歴史条件を体現した空間なのである。